様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５　月　５　日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号： 20520254
研究課題名（和文）アジア系アメリカ「基地文学」の系譜――戦争・記憶・語り
研究課題名（英文）Asian American literatures of “the U.S. military bases: war, memory, narrative
研究代表者
小林　富久子（KOBAYASHI FUKUKO）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：00063751

研究成果の概要（和文）：２０世紀後半のアジア各国に次々と建てられた米軍基地に関して日系、韓国系、フィリピン系等のアジア系アメリカ作家たちがいかなる態度を表明してきたかを個々の作品分析や作家とのインタヴューを通して明らかにする企てである。結果として以下の知見が得られた。１）基地周辺での一般的アジア人の日常的現実を生々しく辿ることで、従来の米国=正義・善意、アジア=救われるべき他者といった図式の欺瞞性を示している点、２）基地という環境から新種のハイブリッドな主体意識の生じうる可能性を示唆している点、３）基地売春、戦争花嫁、混血児等の主題を探るにも、ポストコロニアリズムやジェンダーの視点を不可欠として示している点。

研究成果の概要（英文）：In order to explore what we call “Asian American literatures of the U.S. bases,” we conducted a series of interviews with the writers of Japanese, Korean and Filipino origins, analyzing as well those works dealing with the issue of the U.S. military bases in Asia. As a result, we have come to gain the following insights: 1) By vividly depicting the everyday lives of common Asian people surrounding the U.S bases in Asia, those works seem to deconstruct the fixed image of the Americans as just and good people and Asians as the inferior “other” who need to be saved by the U.S. 2) they simultaneously show each writer’s hope for the new kind of subjectivities more hybrid and multicultural, 3) they demonstrate that the perspectives of gender and postcolonialism should be essential to explore such themes as military prostitution, war brides and mixed children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学:英米・英語文学
キーワード：アジア系アメリカ文学、基地、戦争、記憶、語り

１．研究開始当初の背景

(1)準備状況

本研究代表者及び共同研究者はいずれも「アジア系アメリカ文学研究会」(AALA) の会員であり、これまでアジア系アメリカ文学に関する数々の共同研究に携わってきた。うち、科研費による主な共同研究としては、アジア系に対するオリエンタリズム的眼差しに関するものが挙げられる。さらに、20 世紀後半に合衆国がアジア各国に対して頻繁に軍事介入を行った結果、各々の祖国を戦場とされたアジア系アメリカ人たちがいか

なる戦争語りを行ってきたかに関しても、「アジア系文学と戦争」というシンポジウムを開催した。本研究はそうした探求を発展させたものである。

(2)関心の所在

（1）でも触れた通り、20 世紀の米国史を振り返ると、しばしば目につくのが米軍によるアジア各国への軍事介入ないしは戦争の動きである。その主なものだけでも、フィリピン戦争、対日戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争など、枚挙に暇がない。それらを通して主流のアメリカ人たちが「世界の指導者」としての自己形成を可能にしてきたことは周知の事実である。

それでは、祖先の地や出身国を戦場とされたアジア系の人々は各々の戦争をどう捉えてきたのか。彼らにとってもそうした戦争が個々の主体形成に重要な役割を担ってきたことは、過去のアジア系作品の相当数が各々の祖国が関わった戦争を主題としていることからも明白である。

本研究は、そのように戦争を主題とするアジア系文学の中でもとりわけ、アジア各地に多数出現することになった米軍基地にまつわる作品群を扱う。特に 1970 年の新移民法発効以降、多様なアジア各国から渡ってきた新移民作家にこのテーマを扱う度合いが高いのは、一つには、自国の軍事行動の結果、多数生じた難民の受け入れに合衆国政府が積極的となったことにも関わっている。ここでは、そうした米軍基地に関わるアジア系作品を一括して、「アジア系基地文学」と呼ぶことにしたい。

未だ米本国でも殆ど未踏の領域とは言え、この分野の先駆とも見られる作品がかなり以前から主に白人主流作家の手で生み出されてきている。例えば、太平洋戦争後の日本での米兵と日本人女性との恋愛をロマンティックに描いた『サヨナラ』やベトナム戦争中の米兵とベトナム人女性の恋愛を感傷的なタッチで描いた『ミス・サイゴン』などが挙げられる。双方に共通するのが、アメリカ人を先進国人とする一方、アジア人(特に女性)を後進性に結びつけるといった紋切型の図式である。当然、今日のアジア系「基地文学」はそうした想定に疑念を発し、それを根本から覆そうとするものである。以上のような観点から、今日のアジア系「基地文学」の系譜を作成し、その意義を問うことが本研究の関心事である。

２．研究の目的

(1) 本研究の趣旨

本研究で扱う「アジア系基地文学」が主に 1980 年代以降に発表された新移民作家の作品からなることについては、既述の通りだが、そうした作品群に通底するのが、以下の 2 点である。

① 基地周辺でのアジア人たちの日常的体験を生々しく描くことで、米国の軍事介入がもたらしたものを細密に提示し、よって従来米国に都合よく働いてきたアメリカ＝善玉、アジア＝救出されるべき弱者といった二項対立的構図を揺るがす効果をもつ点。

② そうしたいわば脱構築的な側面とは別に、基地という特殊な場から生み出されうる人種・国籍・性別等、多様な境界を横断する多文化的な主体意識ないしは関係性を示唆しがちな点。

具体的には、本研究で扱う「アジア系基地文学」は、４つのサブジャンルに分けることが可能である。その各々の代表作と目される作品も併せて列挙してみると、次の通りとなる。

「戦争花嫁」の語り： Velina Hasu Houston *Tea* 等

「売春婦」の語り：Nora Okja Keller *Fox Girl* 等

「混血児」の語り： Jessica Hagedorn *Dogeaters* 等

「孤児」／「養子」の語り：Heinz Insu Fenkl *Memories of My Ghost Brother* 等

(2)最終的目標

冒頭でも述べた通り、本研究はこれまで研究代表者や共同研究者が行ってきたアジア系アメリカ人に対するオリエンタリズム的眼差しや戦争に関する研究の延長線上にあるが、ここではさらに視野を広げて、越境、ナショナリズム、帝国主義等の主題を人種・民族のみならず、ジェンダーやポストコロニアリズム等の視点をも用いることで、幅広い文化研究の領域にも貢献することを目指すものである。

３．研究の方法

本研究は以下の３段階に分けて行った。

(1) 第１段階

米軍基地に関わるアジア系アメリカ文学テクストを、アジアにおける米軍基地関係の研究書等とともに、できる限り精査した。

(2) 第２段階

研究者の各々が主に米国に赴き、作家・研究者や基地経験をもつ当時者からの聞き取り調査を行った。同時に米国の大学図書館等でアジアでの米軍基地に関わる一次資料の収集をも行った。

(3) 弟３段階
研究者各々がアジア各国に赴き、現地調査を行うことにした。具体的には、日本及び韓国の米軍基地やフィリピン等の米軍基地跡地を訪れ、周辺の状況を視察するとともに、戦争博物館や記念館等での資料収集を行った。

視察した基地（跡地）は以下の通り。

韓国	ヨンサン基地（ソウル市）
フィリピン	クラーク基地跡（マニラ市）
日本	嘉手納基地（宜野湾市）

４．研究成果
(1)本研究から得た主な知見

まず断っておきたいのは、一口に「アジア系アメリカ「基地文学」」と言っても極めて多様で幅広いので、ここではアジア系文学でもとりわけ基地のテーマを頻繁に扱いがちな３つのエスニック集団、すなわち、韓国系、フィリピン系、日系文学に焦点を絞ることとした。それとともに、アジア系「基地文学」の背景として、アジアにおける米軍基地の推移を総合的に跡付けるという作業をも行った。

結果として得られた具体的知見をまとめると、以下の通りである。

① アジア系「基地文学」の背景―アジアにおける米軍基地の推移と現状（田村担当）

現在の米軍基地の基礎は英米の帝国主義時代に作られた。第二次大戦中、世界中に広がった米軍基地は、その後朝鮮戦争やベトナム戦争による中断をはさみ、全体的には縮小傾向にあったが、対共産主義対策、市場や資源の確保、テロ対策等からアジア各国との関係は強化されてきた。

韓国に関しては、朝鮮戦争を機に、1953 年、相互防衛条約が締結され、各地に基地が建てられた。近年完全撤退の計画はあるが、北朝鮮の動向から先延ばしされている。

フィリピンには、米西戦争（1898 年）以降、米軍が駐留し、ベトナム戦争等の出撃拠点となったが、マルコスの失墜を受け、80 年代後半からの民族主義と基地反対の動きの結果、1992 年に完全撤退した。

在日米軍は、第二次大戦後の占領軍の延長線上にあり、1951 年の旧安保条約を根拠に、引き続き駐留している。地政学的な優位性や豊富な物資等の点で、日本は米軍にとって重要と見られている。

米軍と周辺住民との関係においては、様々な問題が発生した。韓国では、87 年の民主化以降、基地反対運動が活発化している。2000 年には、戦闘機が機体の安全を優先し爆弾を投下したことから、反基地闘争が起き、2002 年には装甲車による中学生２人の轢死事件が起きた。また、ソウル北部、東豆川の「基地村」では、1992 年に韓国人女性が米兵に殺害され、宗教や女性団体等が反対運動に立ち上がった。

フィリピンでは、1973-78 年の間、一日に約 3 件の割合で米兵による犯罪が起きた。1964、65 年にはクラーク基地内でフィリピン人が射殺され、2000 人のデモにつながった。68 年には基地周辺でフィリピン人女性が米兵３人に暴行された。オロンガポ市は、ベトナム戦争以降、軍人相手の「慰安産業」が盛んとなった結果、性病が流行し、女性への暴力も横行した。米軍撤退後は、混血児が多数残された。

日本では、1952 年以降、20 万件以上の事件・事故が発生している。1995 年には沖縄米兵少女暴行事件が起き、8 万人超の抗議デモに繋がった。性売買についても、朝鮮戦争期、小倉の基地や、羽田空港近くのマックリニー基地等では「慰安産業」が盛んとなり、基地周辺では、混血児・無国籍児・孤児問題も発生した。

国家間の政治・経済・軍事的関係から基地を捉えるだけではこうした事例は背景に追いやられる。だが、これらは決して軽視されるべき問題ではないと考える。

② 韓国系基地文学（小林担当）

米軍基地にまつわる諸問題を真正面から扱う作品がとりわけ多いのが韓国系文学である。その背景としてはまず、未だ朝鮮半島全体が公式には戦争状態にあり、従って、他のアジア系の人々にもまして、戦争や基地の問題を切実に捉えがちであることが挙げられる。と同時に、冷戦構造の終わりが叫ばれる今日、自らの祖先のトラウマ的出来事を、従来のように米国側の視点に留まらず、自身の民族的視点からも見直すことへの欲求が高まったこともある。さらに、度重なる米兵の不祥事から韓国内で激しい基地反対運動が繰り広げられていることも一因であろう。いずれにしろ、「基地文学」のサブジャンルとしての「売春婦文学」「混血児文学」「孤児・養子文学」等の作品を数多く含む韓国系文学がアジア系「基地文学」の核をなすものであることは、明白と言える。

それでは、そもそも韓国内で米軍基地の存在が目立つようになったのはいつ頃からだろうか。これに対しては、1950 年代の朝鮮戦争後と言うことができる。次いで、60 年代のベトナム戦争時にも、ベトナム派兵の拠点として、在韓米軍基地のさらなる増

強が見られた。

そのような状況から世に出された韓国系「基地文学」の代表的作品としては、Nora Okja Keller の *Fox Girl*（2002）と Heinz Insu Fenkl の *Memories of My Ghost Brother*（1996）が挙げられる。

これら二作品は、韓国系のみならず、アジア系「基地文学」の原型をなるともとれるので、以下に両者に共通する点を列挙してみるのも意義があろう。

・いずれも 1960 年代のベトナム戦争時の在韓米軍基地の町を舞台に設定している点
・いずれの主人公も、朝鮮戦争の申し子的存在――即ち、当時の米軍基地に種々の点で依存しつつ生きることを余儀なくされた両親から生を受けており、従って自らも基地の町で日常生活を送らざるをえない 10 代の少年少女――である点。
・*Fox Girl* での主人公を演ずる２人の少女は、ともに黒人米兵相手の売春婦を母親とするため、基地独特の暴力的かつ猥褻な状況に日々晒されているのに対し、*Memories of My Ghost Brother* における主人公の少年は、一般韓国人女性を母に、白人米兵を父にもつことから、より恵まれた境涯にあるという違いがあるが、結局のところいずれも、米軍が支配する基地の町で低い自意識をもたざるをえない母親たちの心的状況を反映する存在として示されている点。

以上の２作品でともに問題とされているのが、米国の物理的力や消費文化を遍く世界中に行き渡らせようとするネオ帝国主義的姿勢である。さらに今一つ留意しておくべきは、基地周辺の韓国人社会にも黒人・売春婦への差別が存在するなど、人種・階級による序列意識が顕著とされている点である。

だが、同時に、従来の一律的見方に代わる多様な価値観が基地という環境から生み出されることへの期待がいずれの作品でも表明されていることをも銘記すべきである。

最後に、これら二つの作品を比べる時、一目瞭然となるのが、作者各々のジェンダー意識からくる違いである。即ち、男性作家フェンクルの母親たちが各々の利己心からわが子の遺棄に走るが故に、しばしば化け物的存在として示されるのに対し、女性作家ケラーの場合には、母親の各々が女性として置かれている種々の過酷な状況とともに提示されるため、子を遺棄する母親=魔女といった図式が成り立ち難くされているのだ。以上のことから、アジア系「基地文学」の分析にもジェンダーの観点が不可欠であることを強調しておきたい。

③フィリピン系基地文学（河原崎担当）

フィリピンの米軍基地の位置づけが他のアジア諸国に比べて異なるのは、アメリカがかつての植民宗主国であり、現在のポストコロニアル状況をもたらした歴史背景による。米軍の主要基地は 1902 年から 1941 年までのアメリカ植民時代に築かれており、いずれもスペイン植民時代の重要な戦略的な場であった。独立後、基地は協定により米軍が 1992 年に撤退するまで使用し、その間に多くの基地問題をもたらした。それは今日なお、混血児など未解決の問題として大きな禍根となっている。そこから生じたフィリピン系基地文学に共通する概念は越境と混血で、従来とは異なる意味合いを持つ。

フィリピン系基地文学を大別すると、２系統に分かれる。すなわち、①米軍基地そのものを文学テーマとするものと、②基地問題関連を取り上げたものである。①の作品の中から注目したいのは、Cecilia M. Brainard, *Magdalena*(2002)である。反戦を基調としつつ３世代のフィリピン女性の年代記を米兵と米軍基地に絡めた秀作であり、フィリピン系基地文学の代表的作品として評価しうる。②の作品としては、Jessica Hagedorn, *Dogeaters* (1990)を挙げたい。米兵と売春婦の混血児や米兵の末裔が登場し、越境、混血というテーマが植民地主義の告発を軸に展開される。

二つの系列に共通するのは、故国にこだわる移民世代の女性作家の作品という点である。展開される越境、混血という共通概念は、いずれも移民文学一般につきまとうものではあるが、基地を基軸として捉えると全く新たな意味づけを可能とする。フィリピン系アメリカ人作家が見出したのは、マダム・バタフライなどを否定するような、肯定的な混血を可能とする越境なのである。ただしそこには混迷もまた付随する。その混迷が象徴するのは故国のポストコロニアル状況であり、その状況を憂いこだわる作家たちが、アメリカサイドからそれを描き続けるという構図が明らかとなる。作家たちのジェンダー問題へのこだわりも明らかだ。このように基地テーマはフィリピン系作家には極めて複雑で重い意味をもつゆえに、今後も様々な角度から引き継がれるのは明白である。

④日系文学（稲木担当）

従来の日系文学において、戦争については、第二次大戦中の日系人の強制収容という特別な歴史に特化されて語られてきた。しか

し、近年、過去の戦争を巡るナショナル・メモリーやパブリック・メモリーを相対化し、脱構築する試みが行われるようになると、アメリカとアジアとの戦争の再定義も活発に行われ、日系文学においても「基地文学」として注目すべき新たな試みが提示されるようになった。このような近年の試みの先駆けとなったのが、劇作家ヴェリナ・ハス・ヒューストンである。

戦争花嫁の母を持つ日系アメレージアンのヒューストンは、従来の日系アメリカ人移民史で空白のままであった戦争花嫁の歴史を日本やアメリカを舞台に語り直し、注目された。ヒューストンの戦争花嫁三部作でテーマや演劇的な手法の上で、特に評価されたのが *Tea*（1986）である。1960 年代のカンザス州・ジャクソンシティにある戦争花嫁のコミュニティを舞台に描かれたこの劇には 4 人の戦争花嫁が登場し、それぞれの積年の思いを語り合う。4 人の戦争花嫁を通して示唆されるのは、シンシアー・エンローが論じた「女性の軍事化」の過程に他ならず、ジャンクション・シティは、単に舞台の背景ではなく、戦争花嫁を周縁化する特別な場所として表象されている。ジャンクション・シティは、「アメリカ陸軍発祥の地」として知られるフォート・ライリー基地とともに発展をしてきた。アメリカの軍事政策上、重要な役割を担ってきたフォートライリー基地の存在が戦争花嫁のコミュニティ内のあらゆる側面を支配し、複雑な権力の網目をめぐらし、監視していたことが、*Tea* を通して明らかにされる。*Tea* において、ヒューストンは、かつてネイティヴ・アメリカンに対する暴力的な排除と差別の歴史の拠点でもあったフォートライリー基地の歴史を戦争花嫁の状況と接続させることで、不可視化されてきた戦争花嫁の歴史を重層的に語り直したのである。

ヒューストンとは異なる立場から日系の「基地文学」に新たな潮流を生み出した劇作家がジョン・シロタである。ハワイ生まれのオキナワンの二世作家であるシロタは、2005 年に、*Voices from Okinawa* を発表し、沖縄の人々にもたらす基地の影響を描いた。この劇では、那覇にある英語学校の教師として沖縄にやってきた混血のカマ・ハッチンスが生徒や大叔母との交流を通して、基地に対して抱く様々な怒りや悲しみを知らされ、次第にオキナワン・アメリカンとしてのアイデンティティに目覚めるまでの過程が描かれている。戦後、占領軍の一員として、日本での任務を経験したシロタは、オキナワンである自身が占領者アメリカと被占領者沖縄との中間にたつ存在であり、オキナワンとしての政治的、文化的に多元的な位置を意識するようになったという。シロタは、この劇において沖縄の人々の基地に対する複雑な思いを描くことで、オキナワン作家としての新たな方向性を提示している。自ら沖縄に滞在した時に、アメリカの兵士達が沖縄の歴史や文化について関心を持つこともなく、沖縄に対する偏見を募らせていることにシロタは疑問を抱いたという。沖縄の人々の声に耳を傾け、それをアメリカ社会に届けることがオキナワン作家として取り組まねばならないテーマであることをシロタは認識し、かつての「二重のマイノリティ」としての呪縛から脱して現代のオキナワンとしての新たな可能性を見出したことをこの劇は示している。

以上のように日系アメリカ基地文学はヒューストンやシロタなど従来の日系アメリカ文学研究では周縁化されてきたアメレージアンやオキナワンの作家によって生み出されてきた点に興味深い共通性がある。ヒューストンやシロタは、先述したように、長い間、日系文学において触れられることもなかった戦争花嫁やオキナワンの様々な記憶をアジアとアメリカという中間地帯にたち、トランスナショナルな観点から語り直すことで、日系アメリカ基地文学としての先駆的な試みを示しているといえよう。

（2）今後のアジア系「基地文学」研究の展望

以上、アジア系「基地文学」研究から得られた知見を列挙してきた。それらを基に、本研究に携わった 4 人は、2010 年 7 月 10 日に早稲田大学で催された AALA 例会において「アジア系アメリカ「基地文学」の系譜―戦争・記憶・語り」と題するミニ・シンポジウムを組織した。発表後の活発な質疑応答からも、このテーマがきわめて刺激的なものとして受け止められていることが実感された。折しも沖縄の普天間基地の移転が大きな問題となっており、それもこのシンポの盛会の大きな要因となったことは間違いない。但し、単なる話題性の域に留まらず、主要なアジア系文学作品を別の新鮮な角度から見直し、新しい意義を探る上でもきわめて意義深いものであることも言い添えておきたい。

世界的に見ても未踏の領域に属するものと言えるので、本研究で得られた知見の発信の場を今後は海外の学会にも広げることで、国際的に貢献するとともに、さらに幅広く多角的な視点から探求してゆきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計８件）
(1) 河原崎やす子、基地文学と越境・混血―フィリピン系アメリカ文学からの論考、AALA Journal No.14、2011、47-57.（査読有）
(2). 平石（稲木）妙子、記憶の未来化――ヴェリナ・ハス・ヒューストンの戦争花嫁劇、共立国際研究、27、2010、87-98.
(3) 小林富久子、ナショナルな物語を超えて―今日のアジア系アメリカ女性作家のナラティヴ、社会文学、2009、74－84.（査読有）
(4) 河原崎やす子、Dreaming in Cuba にみるポストコロニアル故国表象、ポスト／コロニアルの諸相、彩流社、2009、191-228.
(5) 河原崎やす子、フィリピン系アメリカ文学とポストコロニアル問題、AALA Journal No.14、2009, 50-60.（査読有）
(6)小林富久子、現代の伝承文学としての日系人強制収容ナラティヴ、英語文学とフォークロア、南雲堂、2008、343-357.
(7) 平石（稲木）妙子、戦後再定住期アメリカ・カナダにおける日系作家の創作活動、平成 17 年度- 19 年度科学研究補助金報告書、2008、1-32.
(8) 河原崎やす子、フィリピン系アメリカ人とその文学－ポストコロニアル観点からの考察、岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要、47、 2008、1-11.（査読有）

〔学会発表〕（計３件）
(1) 河原崎やす子、回帰線アメリカ文学―アジア系とカリブ系を繋ぐポストコロニアル思考、日本アメリカ文学会中部支部例会、2010 年 11 月 20 日、愛知淑徳大学

(2) 小林富久子、河原崎やす子、平石（稲木）妙子、田村亮 、シンポジウム・基地文学の系譜―戦争、記憶、語り、アジア系アメリカ文学研究会第 94 回例会、2010 年 7 月 10 日、早稲田大学

(3) 小林富久子、河原崎やす子、他、シンポジウム・アジア系アメリカ文学批評の最前線、アジア系アメリカ文学研究会夏期フォーラム、2008 年 9 月 13 日、共立女子大学

〔図書〕（計２件）
(1) 小林富久子、平石（稲木）妙子、河原崎やす子、他、世界思想社、アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために、2011、ページ未定
(2) 河原崎やす子、小林富久子、平石（稲木）妙子、DPT 出版、ジェンダーから見るアジア系アメリカ人コミュニティのオリエンタリズム受容：科学研究費補助金研究成果報告書、2008、79

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　富久子（KOBAYASHI FUKUKO）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：00063751

(2)研究分担者
河原崎　やす子
（KAWARASAKI YASUKO）
岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授
研究者番号：80341808

平石　妙子(HIRAISHI TAEKO)
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：80060705

田村　亮（TAMURA RYO）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手
研究者番号:　20507983